

乾燥地におけるタマネギ乾燥事業 <その3>

—乾燥機メーカー・大紀産業と国際耕種の取り組み

現地での反響

日本の神戸港から旅だった船荷がインド洋上をへて紅海のポートスーダン港に到着したという知らせを受けとったのは2016年3月初旬のことであった。

船荷はいうまでもなく日本製電気乾燥機である。本機は、現在稼働停止しているスーダン国カッサラ州の大規模乾燥タマネギ加工の旧工場に換わり、日本の電気乾燥機を用いて、農家・農村女性グループが運営できる、小規模乾燥タマネギ工場を立ちあげるために試験的に導入された。NOTA (National Organization for Technology Assimilation) をはじめとする有志により構想された本事業を構想するにいたった経緯や背景については本シリーズ第1回で、機材導入後の乾燥タマネギ生産に向けての現地での協働作業や取り組みの経過については第2回で紹介したとおりである。本稿では、導入機材に対して最終受益者である農家グループがどのような反応を示したか、彼らの率直な感想やその延長線上にある将来の課題についてふれる。

慣れない通関手続きに思った以上の日数を費やし、陸路をさらに約12時間掛けて皆が待ち焦がれた船荷はカッサラ州へまでとどけられた。乾燥機の到着、それは待ちに待った瞬間であった。農家グループの仲間たちの熱い期待の眼差しが到着した木箱の中身にそそがれているのを感じた。木箱の中身を見てまず皆が示した素直な反応は「コンパクト」であるというものであった。小規模乾燥タマネギ工場の構想自体は好意的に受けとめられていたが、機材の見た目が思いのほか小さく、皆が思い描いていた感覚とあまりにかけはなれていた。この先入観は、本事業をとおしてたえずつきまとうことになった。しかし試験導入された電気乾燥機が実際に稼働をはじめ、乾燥タマネギの製品が生産され、実績が見えるようになると、この先入観は少しずつ氷解していった。

小規模工場構想の真意は、複数の電気乾燥機を組み合わせて、農家の必要とする加工量に応じて柔軟に処理することにあつた。この構想を農家グループに理解してもらうためには、順序が必要であった。まず実証活動は、電気乾燥機一基あたりでの収益性を示し、つぎに複数基を組み合わせることで処理量を調整できる有効性を証明することとした。電気乾燥機一基あたりで確実に収益が得られるということが次第に明確になり、

全体の構想が農家グループにも伝えるにつれて、彼らの反応にも少しずつ変化がでてきたように感じている。当案件化調査においてカッサラ州とハルツームの計3回の小規模乾燥タマネギ加工のセミナーを実施し、現実的な工場稼働に向けてのイメージが徐々に共有され、農家グループの理解が醸成されてきた。予想外にうれしかったのは、農家グループ以外の国際機関やNGO、民間企業等が本事業への構想やアイデアに興味を示してくれたことであった。商品サンプルとしてならべられた製品の完成度と安定した品質も魅力のひとつとなったようである。



カッサラでのセミナー開催



袋詰め乾燥タマネギの展示

本事業は、2017年6月にJICA普及・実証事業として採択され、現地での実証・展示はプロジェクトとして継続されていくこととなった。今後は、小規模乾燥タマネギ工場事業として、より効率的な電気乾燥機の導入や運用の検討、高品質な製品を安定して生産するための精度のたかいデータ蓄積と解析・検証がもたえられることになる。

将来の夢は、日本から輸入の電気乾燥機を用い、加工した農産製品のスーダンからの海外輸出を実現することである。そのためには製品の海外市場への展開の具体的な可能性を示していく必要があるだろう。加えて、機材の導入に関しては、日本とスーダンの商取引に関してもさまざまな制約があることから、取り組むべき課題は少なくない。道のりはまだとおいが、立ち足る難題をひとつひとつ克服しながら、その夢の実現にむけて歩をすすめていこうとおもっている。



連邦政府向け最終セミナー